「令和２年度教育研究構想」

１　研究主題

「主体性を発揮する児童の育成」
～児童の実態に応じ，学ぶ意欲を促す指導方法の工夫を通して～

２　主題設定の理由

（１）昨年度の実践から

研究主題を「主体性を発揮する児童の育成」とし，昨年度，副題を「『自分事の問い』を追究し，深く学ぶ授業づくりを通して」と設定して研究を行ってきた。とりわけ，学力フォローアップ校事業の第２年次の研究として，大きく次の実践を行った。

①児童の実態把握をする

・レディネステストや系統性のある単元のテストなどから，児童が何につまずいているのかを見つける。
・日々の授業ノートや宿題プリントなどの間違いから，児童のつまずきや間違い方の傾向をつかむ。
・つまずきを把握後，なぜそのようなつまずきをしているのか要因を探る。

②実態把握を学習過程の工夫に活かす

・つまずきを解消するためにどのような手立てを講じるかを考える。
・「本物の課題」を「本物の方法」で追究させる。
・明示的な指導を行う。
・授業のユニバーサルデザインの視点や個別最適化（一人一人にあった指導の方法や内容等）の視点を児童や学級の実態に応じて取り入れる。

③実態把握を学習環境の工夫に活かす

・アフォーダンス理論に基づいた学習環境づくり（環境が人に働きかける力を教育活動に有効利用することをねらう。）

その結果，以下のような成果と課題を明らかにすることができた。

成果

○対象となる児童のつまずきを把握し，その実態を活かした授業づくりや学習環境づくりを行ったことで，児童の学習意欲の向上や学力の定着へつながったこと
○学習環境づくりに取り組んだことで，児童が必要なときに学習環境を使って自律的に学ぶ姿が見られ，効果的だったこと
○学習環境づくりについての研修等を通して指導者自身，学習環境の重要さを実感するとともに，理解を深めることができたこと

課題

●学力フォローアップの取組が学級全体の学力向上につながるようにすること
●日々の見取りにより，自力で解決したり，文章を読んだりするなど粘り強く取り組む力や，自分を見つめ直し高めようとする力が弱いと感じること

（２）学力調査から

本校の令和元年度学力調査の結果は，次の通りである。

学力調査	本校平均	県平均	県平均との差
全国学力・学習状況調査【国語】	77%	66%	＋11
全国学力・学習状況調査【算数】	79%	68%	＋11
標準学力調査【国語】	６学年中５学年で全国平均以上（平均 6.08 点上回った）		
標準学力調査【算数】	６学年中５学年で全国平均以上（平均 4.95 点上回った）		

標準学力調査では，校内平均（国・算の平均）が全国平均を 5.5 ポイント上回った。これは昨年度よりも 1.2 ポイント上回っていた。

令和元年度の学力フォローアップ対象児童について，標準学力調査（平成 30 年度・令和元年度）の国語と算数の正答率（基礎的内容）の全国平均との差は，以下の通りである。（１年生は経年変化が見られないので省略する。）

学力調査	児童Ａ	児童Ｂ	児童Ｃ	児童Ｄ	児童Ｅ
平成 30 年度　標準学力調査	-25.0	-20.1	-31.4	-28.9	-25.6
令和元年度　　標準学力調査	-12.0	-50.6	-31.7	-27.5	-3.7
差の変容	13.0	-30.5	-0.3	1.4	21.9

これらの学力調査の結果から，以下に示す成果と課題が明らかになった。

成果　○授業改善による学力の向上（全国学力・学習状況調査の対県比，標準学力調査の対全国比）
○昨年度以上に学力が向上したこと
○学力フォローアップ対象児童にも変容が表れていること（対象児童の標準学力調査の全国平均との差において，改善のある児童がいること）

課題　●標準学力調査の特に算数科において，正答率 40%未満の児童が増えたこと
●国語では「言葉の特徴や使い方に関する知識・技能」，算数では「数と計算」，「測定，変化と関係」の領域に課題があること

（１）（２）から，授業改善の推進によって，県平均や全国平均を上回る学年が増えてきた。しかしその一方で，学力調査の特に算数科で，正答率 40%未満の児童が増えたという結果となった。それには，学習の定着が不十分であるということと，自力で解決したり，文章を読んだりするなど粘り強く取り組もうとする力や，自分を見つめ，高めようとする力が弱いということが関係しているのではないかと考えられる。

そこで今年度も，昨年度の指導を継続し，児童のつまずきは何か，その要因は何か，それに対する手立てをどうするかと考えるとともに，教科の本質を大切にした学びを展開していく。また，課題に対応するために，

①単元でねらう目標（知識及び技能，思考力・判断力・表現力等）に沿って，児童のつまずき・要因分析をし，手立てを講じ，つまずきの解消を図ること

②児童にとって学びたくなるような意味のある学習にする工夫（単元構成の工夫や学習環境の工夫）をし，児童の学ぶ意欲を促すこと

を重点とし，取り組みを進めていく。①と②により，個に対しても，学級全体に対しても有効な手立てを講じることで，学級全体の学力向上，学習に向かう好循環をつくり，課題が改善するよう取り組んで

いく。

（３）研究主題について

○　本校の教職員がもつ児童観

教員基点の学習から児童基点の学習への転換を図るにあたり，本校教職員一同で，以下のような児童観に立つ。

・本来どの児童も「分かるようになりたい。」「できるようになりたい。」という思いや願いをもって授業に臨んでおり，１人１人が個性豊かで無限の可能性を秘めたかけがえのない存在である。 ・文脈がとれれば，どの子も資質・能力を発揮することができる。

このような児童観に立った上で，主体性を以下の資質・能力を発揮している姿と設定した。

○　主体性を発揮する児童の姿とは

主体性を発揮する児童とは，本校で定めた６つの資質・能力を発揮している児童のことである。それぞれの資質・能力の詳細については，別紙１「本校が設定した資質・能力とその下位項目及び詳細と 21 世紀型能力との対応」に整理している。

知識及び技能	様々な場面で活用することができる知識や技能
思考力，判断力，表現力等	探究力（問い続ける力），思考力・判断力・表現力（考え表現する力），協働・合意形成意欲（みんなと解決する力）
学びに向かう力，人間性等	本質を志向する価値観（するどい目），友達や地域社会の課題を引き受ける価値観（自分事にする心），メタ認知力（自分を見つめ育てる力）

（４）研究の副題について

今年度は，児童の実態を把握し，それに応じた手立てを取り入れるという視点をもって，昨年度までに開発した単元のブラッシュアップを図り，授業づくりに取り組む。また（２）で述べた２つの重点取組を進めていくために，副題を「児童の実態に応じ，学ぶ意欲を促す指導方法の工夫を通して」とした。児童の実態を把握し，その実態に応じた，または，その実態を活かした指導方法の工夫を行い，児童の学びの実現を目指す。

ここでの児童の実態とは，児童の強み（特性や学びに向かう力等）と学習内容に関するつまずきの２つを指す。特に学習内容に関するつまずきは，単元でねらう目標（知識及び技能，思考力・判断力・表現力等）に沿って，児童のつまずきの予想と把握・要因分析を行い，整合性のとれた手立てを講じることで，つまずきの解消を目指し，その取組が学級全体にも良い影響を与えることを目指す。

３　研究のねらい

児童の実態把握を行い，学習のつまずきを解消したり，児童の強みや特性を活かして学ぶ意欲を促したりする授業づくりを通して，主体性を発揮する児童を育成する指導方法を追究する。

４　研究仮説

児童の実態把握を行い，学習のつまずきを解消したり，児童の強みや特性を活かして学ぶ意欲を促したりする指導方法の工夫を行えば，つまずきの早期発見・解消をしていくことができ，学習に対する苦手意識や学力差を未然に防止することができるだろう。また，対象児童に焦点をあて「主体的な学び」の実現を目指していくことは，すべての児童の「主体的な学び」の実現につながるであろう。

５　研究内容

（１）実態把握をする

・学習内容に関するつまずきは，単元でねらう目標に沿って，レディネステスト・既習の単元末テスト・児童の様子等からつかむ。

・指導事項や内容の系統・学習歴・特別支援の視点・学習意欲や自信等の観点を用いて，児童のつまずきの要因を分析する。

（２）実態把握を指導方法の工夫に活かす

※昨年度の取り組みの成果から以下の手立てが挙げられるが，今年度これらの手立てを拡充・深化・整理していく。

〈つまずきを解消し，学ぶ意欲を促す手立て〉

○　手立て①　学びを本物にする

・教科と生活や行事，教科と教科を関連づけ，現実の社会（学級，学校，地域など）に実在する課題を解決する「日常生活に役立つ学び」の視点で授業をつくる。

・現実の社会で使われている本物の追究方法（解決の手順や方法）をそのまま取り入れる「学問に根ざした大人みたいな学び」の視点で授業をつくる。

○　手立て②　「追究したい」を引き出す

・児童が知っていること，経験したことを存分に引き出して使えるようにする。

・学習材に対して「思い」や「願い」をもたせたり，自分の考えとの「ずれ」や「隔たり」，対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせたりする。

・児童が何としても達成したいと思う「実行」過程を設定する。

○　手立て③　成功体験につなぐ

・自力解決の場面で児童の考えを見取り，意図的指名に活かすことで，児童が活躍でき，指導者や学級の児童からも評価されることで成功体験を積み上げることをねらう。

・「ここが分からなかったんだな。」と自分を見つめ，「それなら自学でここの問題をやってみよう。」と自分を育てる力を高めることで，学習に対する自己肯定感の向上をねらう。

○　手立て④　アフォーダンス理論に基づいた学習環境づくりを取り入れる

・実物や体験など，児童の好奇心を刺激し，活動を誘発する学習環境を取り入れる。

・児童の学習のつまずきに応じて学習環境を変えたり（リカバリーできる学習環境），工夫している児童の学び方を共有したりするなど学習指導をサポートする。

○　手立て⑤　学習の土台をそろえる

・個別支援や一斉指導による既習の確実な定着やスモールステップによる単元構成により，児童の足場をそろえ，全員が学習に向かうことができるようにする。

○　手立て⑥　明示的な指導を行う

・単元で使わせたい見方や考え方，複数の単元を渡って使用している見方や考え方を明らかにする。

・学習内容が使える場面を考えさせる。（学習内容の意味や価値，限界を探らせる。）

○　手立て⑦　授業のユニバーサルデザインの視点を取り入れる

・学習内容の本質を見極め，ねらいや活動をしぼる「焦点化」，見えないイメージや論理をイメージ化する「視覚化」，一人一人の学びを広げ，みんなのものにする「共有化」等のユニバーサルデザインの視点を児童や学級の実態に応じて取り入れる。

６　授業づくりの図

実態に対して整合性のとれた手立てを講じることで，児童の変容（つけたい力をつける）につなげる。

〇児童の様子
・授業ノート
・発言
〇単元末テスト

児童の姿

つけたい力の設定

〇単元の目標（知識及び技能，思考力・判断力・表現力等）
〇指導要領

児童の実態
（強み・つまずき）

〇レディネステスト
〇既習の単元末テスト
・指導事項
・既習の内容
〇児童の様子
・授業ノート
・発言
・宿題
・音読

要因

〇指導事項
〇内容の系統
〇学習歴
・誤学習，間違えやすい傾向
・学習過程のプロセス
・学び方
〇特別支援の視点
・優位性
・メモリ
・処理速度
〇学習意欲，自信

手立て

〈つまずきを解消し学ぶ意欲を促す手立て〉
① 学びを本物にする
・「日常生活に役立つ学び」の視点
・「学問に根ざした大人みたいな学び」の視点
② 「追究したい」を引き出す
・児童の得意な文脈，児童の分かる文脈で
・教科横断的な視点
③ 成功体験につなぐ
・見取りから意図的指名，肯定的評価へ
・学び方を学ぶ（自分を見つめ育てる力を高める）
④ アフォーダンス理論に基づいた学習環境づくりを取り入れる
・好奇心を刺激し，活動を誘発する
・リカバリーできる
・学び方が学べる（共有）
⑤ 学習の土台をそろえる
・既習の定着（個別・全体）
・スモールステップ
⑥ 明示的な指導を行う
・見方や考え方を明らかにする。
・学習内容が使える場面を考えさせる。
⑦ 授業のユニバーサルデザインの視点を取り入れる
・焦点化，視覚化，共有化
・操作化，動作化
・イメージ化

単元でねらう目標（知識及び技能，思考力・判断力・表現力等）に沿って，児童のつまずき・要因分析をする。（既習の指導事項に遡り，単元の目標に沿った力をレディネステスト等から把握する。）

７　検証方法およびその指標と達成目標

（１）学力調査

・国語，算数，理科の単元末，学期末テストの知識・技能において低学年では75％未満の児童数０人，中学年では60％未満の児童０人，高学年では40％未満の児童０人を目指す。

・全国学力・学習状況調査の国語と算数において40％未満の児童数の減少を目指す。（４月と年度末に実施する。）

・標準学力調査の国語と算数において校内平均が全国平均を３ポイント上回る。

・標準学力調査の国語と算数の基礎正答率において全国平均との差の改善

（２）児童質問紙分析

・学習習慣・学習意欲のアンケートの「学習を最後までやりとげてうれしかったことがある」「分からないことはそのままにせず，分かるまで努力している」の２つの項目の平均で，肯定的評価の割合を80％以上にする。

・児童生徒質問紙調査の主体的な学びの意欲や態度，実現力に関わるアンケート項目において平均値を上回る。